

ワンポイントレッスン（平成24年8月）

崇武館
館長 飛鳥宗一郎
(宗雄)

先人の言葉から学ぶ（その8）

諸行無常（1） 出典・・・大般涅槃經

はじめに

世界には様々な宗教があって、そのいずれかに属している人もあれば無宗教を信条とする人もいるが、我が国では憲法第20条をもって信教の自由が保障されている。それに、日々新しい宗教が生まれている可能性さえある。

宗教を語る時、人間として行うべき日常の正しい生き方や行動を示したり、社会の繁栄や平和を推進させるという目的は有している場合が大多数であるが、往々にして宗教間の闘争や、同一宗教内でも争い事を繰り返してきた歴史もあって、宗教改革とか宗教戦争という言葉は歴史の授業で教わってきている。世の中を良い方向に導くのは反対に、平成7年（1995年）にオウム真理教が起こした無差別殺人を目的とする地下鉄サリン事件をはじめとする忌まわしい犯罪の数々は、人々の記憶から消えることはない。

宗教と生死については、何らかの形で関わりを持つ場合が多い。現代人（ホモ・サピエンス）直接の先祖ではないが2万4・5千年ぐらい前に絶滅したとされる石器と火を使っていた旧人のネアンデルタール人（ホモ・ネアンデルターレンシス。）は、埋葬行為を行ったと思われる遺跡が数多く発掘されている。旧人の埋葬行為だけで宗教の発生かと短絡的に結びつけることできないとしても、ネアンデルタール人は遺体に花を添えていた可能性もあるなど、家族や同胞の死を悼む心情はわれわれと変わらなかったのではと知ることができる。

宗教が発生した理由として、命あるものいつかは死ぬ時が来る、そして死は恐ろしいものだが逃れることはできないという現実問題と大方関連するといつて過言でない。今回のテーマならば「無常迅速」ということだろうか。

宗教の世界分布は、キリスト教の信者数が20億人で世界の人口を70億人とすれば28%と圧倒的に多く、次いでイスラム教が12億人で17%、ヒンドゥー教が9億人で12%、そして仏教は信者数3億6千万人で5%となっている。この中で民族や地域を超え文化的、社

会的な影響力が大きい理由から「世界の三大宗教」といわれるのがキリスト教、イスラム教と仏教である。今回のテーマは仏教から「諸行無常」を取り上げるが、前に記した「無常迅速」を語るつもりではない。

世の中に存在する何事も何物も、時間の経過とともに移り変わるのは必定で不変のものなどあり得ないという真実と、その真実を人間はどのように認識して生きることに関係するのかが人生の重用課題といえる。仏典から課題としたのは1月の「慙恥質直」、3月の「世尊拈華、迦葉破顔微笑」に続いて3回目となる。

「諸行無常」の言葉は、般若心経の「空」や後述の「悉有仏性」と同様に仏教を語るとき頻繁に使われ、教理を特徴づける言葉の一つとして引用される。

今回は「諸行無常」の言葉を借りて、過去の人たちの思考、あるいは覚悟というものを考察したいと思った。この言葉が私たちの空手道修業と関係ないのではと思われるかもしれないが、日常生活の心構え（覚悟）の一つとして意に止めておきたい言葉である。

鎌倉新仏教の一つである曹洞宗を開いた道元（1120～53年）は、『志のいたらざることは無常を思わざる故なり（修業に取り組んでも覚りの境地に到達できないのは、それは諸行は無常であることをしかと認識していないからだ）』と語っていることでもこの言葉の持つ重要性が分かると思う。おおよそ道元は仏道修業者を対象として論じているとしても、諸行無常には仏道に限らないもっと広い不偏性を持った言葉であると心得たい。練習、修練、稽古、鍛錬、学習、自修、師事など、いずれも目標を持って教わり学ぶ言葉であるが、いれにおいても一日一日、一瞬たりとも同じ身体や心理状態はあり得ないし、今日の自分は昨日の自分とは違う。その時々をどのように考えるのかをこの課題の中で提起したい。



道元絵図

1 大般涅槃経と諸行無常

(1) 大般涅槃経とは



釈迦涅槃図

諸行無常の言葉が記されているのは大般涅槃経（だいはつねはんぎょう。以下「涅槃経」と略記する）といって、仏教の開祖である釈迦（BC463～383、本名ゴータマ・シッダッタ。釈尊、仏陀）の最晩年の旅から入滅、更に入滅後の遺骨の分配、死後の教えの伝え方に至るまでの教えを叙述した経典で、大乘仏教の基本思想を述べた40巻（北本涅槃経の場合）に及ぶ経典

である。漢語訳が成立したのは4世紀頃と推定されている。

今年1月分ワンポイントレッスン「慙恥質直」では、「遺教経」という釈尊の最後の教誨（物事をよく知らない人に教えさすとす）で遺言に相当する経典からであったが、これは漢字にして約2400字（因みに、般若心経は270字余）程度なので読み切ることができたが、40巻という膨大な経典は私が読み解くなどとても不可能で相手が大きすぎる。したがって、解説文(wikipediaを含む)などからの引用にならざるを得なかったことお断りしておく。

この涅槃経で釈尊は、『全てのものはやがて滅びるものである。私の教えを依りどころ（法灯明）にして、自らを依りどころ（自灯明）にして怠らず励み努めなさい』と信じることを努力する重要性を弟子たちに諭している。涅槃経の基本的教理は次の四つとされているが、今回は仏典の解説が目的ではないので括弧書きの読みと簡潔な説明に止める。

- ① 如来常住（によらいじょうじゅう。仏は法を説く者と一体で、仏は常住し不滅不変である）
- ② 一切衆生悉有仏性（いっさいしゅじょうしつうぶっしょう。人々はことごとく仏の心を持つ。「山川草木悉皆仏性」の経語もある）
- ③ 常楽我浄（じょうらくがじょう。常在する仏と法は、人々を真の安楽にと導き、自我を離れた仏性こそ清浄であり、これが涅槃の世界である）
- ④ 一闍提成仏（いっせんだいじょううぶつ。仏を信じないで誹謗中傷する者も成仏できる可能性がある） 註：一闍提は、仏の言葉を信じない、逆に誹謗中傷などを繰り返す者。

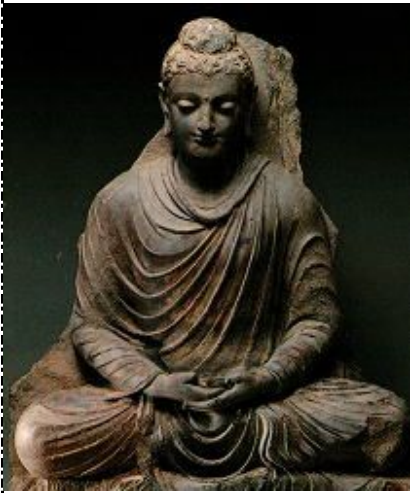
また、涅槃経は法華経（ほけきょう、正しくは妙法蓮華経。日蓮宗他の各宗派の中で尊重される）と対比して論じられることが多いが、両者成立の歴史的背景からの差異は致し方なく、端的には法華経を始発とし涅槃経を終点として考える説もある。

(2) 諸行無常の出どころ

涅槃経の中に、「雪山童子」という寓話がある。それは、仏祖の釈迦が悟りを得て仏となる前のことである。釈迦は、釈迦族の皇太子でバラモン（古代インドの民族宗教）の司祭となるはずの童子であったが、ヒマラヤの厳しい雪山の中で「雪山童子」と人々に呼ばれながら、何故かバラモンでなく仏道を修業を行っていた。

ある日のこと、風の彼方から『諸行無常 是生滅法』と囁くような声が流れてきた。気を付けて声の方に目を向ければ、少し離れた場所に居た羅刹（らせつ、鬼神の総称）が唱えていると分かり、その後の言葉の続きを教えてほしいと童子の釈迦は頼んだ。羅刹は『長い間食事をしていないので、つい疲れが出て出任せに言ったまでだ』と取り合ってくれない。しかし、この言葉には深いいわれがあると直感した釈迦は、『では、どうすれば教えてもらえるのかと』と懇願すると、羅刹は『人間の生身と生

血がほしいと』と言った。釈迦はこれを承諾し、その後続く『生滅滅已 寂滅為楽』を聞くことできた。



後世の人たちが気付いてくれるだろうと、釈迦は聞いた言葉を木々や岩に書き写してから、約束通り羅刹の餌食になるため高台に登りそこから飛び降りた。すると羅刹は突如として帝釈天（梵天と並んで仏教の二大護法善神）に姿を変え、落下する童子を受け止めた。帝釈天は雪山にいた童子だった釈迦の修業の真剣さを試し、後に釈迦が仏となった暁には帝釈天自身を救ってくれるかどうかを確かめたかったということであった。

古代国のガンダーラで発掘された釈迦像

このことから、後々まで「諸行無常 是生滅法 生滅滅已 寂滅為楽」と四文字四句で語られるばかりか、涅槃経を通して仏教の教理に反映されることになったもので、勿論実際にあった話としてではなくても釈迦の正覚成道(出家して6年35歳で覚りを得た)より前に感得した言葉と読み解くことができ、真理と覚りを得るためには命を惜しまない釈迦の真剣さを物語る寓話として後世になって添えられたものであろう。

帝釈天で有名なのは、お馴染みの東京都葛飾区柴又・日蓮宗の寺で「経栄山題経寺」である。通称は「柴又帝釈天」で寛永6年(1622年)の開山であるが、当時から病氣治療や不老不死を願って江戸庶民の参詣人が集まったといわれる。この寺は広い境内を持ち、今にも笠智衆(1904～93年)が演じる「御前様」が現れそうなたたずまいがあって、門前を通りには映画『男はつらいよ』シリーズで知られる「とらや」の団子屋をはじめ川魚料理や土産物の店が軒を連ねている。



経栄山題経寺山門

寅さんシリーズの制作中は観光バスが頻繁に訪れて大いに賑わったといわれ、寺の裏手には今に至り唯一残る江戸川の渡し場『矢切りの渡し』がある。

(3) 諸行無常の意味

「諸行無常 是生滅法 生滅滅已 寂滅為楽」、この四句は「諸行無常偈」とか「雪山偈」と呼ばれるもので、前項で述べたように釈尊が未だ成道に至らないとき、この偈の全てを聞くために我が身を羅刹の餌食にしてまで求めようとした真心が釈尊の釈

尊たる所以であり、涅槃経はその尊崇さを伝える經典である。

- ①諸行無常～この世の現実と存在する全ては、姿形も中味の本質も常に流動変化するもので、一瞬たりとも存在そのものが同一性を維持することはできない、というよりもあり得ない。諸（もろもろ）の行いはこの世にある現実の存在そのものであり、無常とはこれらの姿も本質そのものも一瞬も止まることなく移り変わることを意味する。したがって、これは自然の絶対的な法則であって、世の中に永久不変のものなどないということ。
- ②是生滅法～この世にある全てのものは常に留まることなく移り変わり、生きているものは必ずいつかは死に至るのである。
- ③生滅滅已～生きる（生まれる）、滅する（死ぬ）という移り変わりは、滅してそこでやむ（已）、あるいは終わるということ。
- ④寂滅為樂～以上の真理を会得し迷いの世界から離れ、心安らかな覚りの境地は楽しいものであること。寂滅は、煩惱の消え去った究極の境地を指す言葉である。

2 いろは歌

(1) 漢字の渡来

中国から漢字が移入されたのは、1世紀頃という説もあれば3～4世紀だろうとする説があって定かでない。「魏志倭人伝」（AC280～90年頃成立）によれば漢の時代（BC206～AC220年）から倭国は朝貢使（朝廷に対し貢物を持参して配下の礼を行う使者）を遣わしていたと記されているので、年代ははっきりしないが相当古くから訪れた当地で漢字に接していたのは間違いないだろう。下って、AC300年頃に朝鮮半島を經由して中国の文物が渡来して接するが、この時代になれば卑弥呼（生年不詳～248年没）が治めていた「邪馬台国」から移行し古墳時代前期となる。

それでは、漢字渡来前に文字はなかったのだろうか。これは長年論争の種となり未だ確定した学説はない。古代文字（神代文字）は確かに存在したと唱える研究者もいて、何年か前には岩手県でも発見されたといわれるが未だ解明に至っていない。むしろ、古代文字と確定してよい証拠はなかったとする方が有力となっている。

漢字が渡来して以降、漢字本来の意味の他に大和言葉を表記する手段として活用され、万葉集を記載した「万葉仮名」などとして知られるが、それでも公用文には漢文が用いられていた。

文化文明を育むには言葉とそれを記録する文字の果たす役割は大きく、中国で生み出された漢字は近隣各国に与えた影響は絶大である。中でも、漢字を母体として巧みに自国語の表記法として取り入れた我が国は、表音の手段として漢字の草書体から「平仮名」を、漢字の一部から「片仮名」を生み出し独自に定着させた叡智は素晴らしい。日本の仮名文字は、朝鮮語のハングル文字やアルファベットと違い、漢字を生で受け入れ文字化としたところに特徴がある。

平仮名、片仮名ともに8世紀末から9世紀始めのころから頻繁に用いられるようになり、10世紀初期からは公的な文書や文学書へと広まる。

私が小学校に入学したのは昭和17年(1942年)であるが、その時は片仮名から教えられた。当然幼児向けの本は全て片仮名であったし、平仮名は1年生の3学期以降だったと記憶している。平仮名から教えるようになったのは終戦後の学制改革以降である。

(2) いろは歌

「いろは歌」とは「いろは四十七文字」のことで、「いろは歌留多」のように最後に「京」の字を加え四十八文字としたものもあるが、現在では「ん」を加えることが多い。「五十音」と並んで暗誦させられ国語の学習で馴染みが深い。子供のころは『いろはにはほへとちりぬるをわか・・・』と棒読みで暗記したのは誰しも経験がある。

いろは歌も五十音も、元来は漢字の字音を学ぶために考案され、1000年以上の歴史がある。まず五十音の方は、日本語の母音と子音を分析的に配置したもので、後には文字の体系的な学習に活用され、動詞や形容詞などの活用形にも運用される。古くは「五音(ごいん)」、「五音五位の次第」とか呼ばれ、江戸時代以降は「五十音」や「五十音図」となり現代に至る。ア行から始まり、母音と子音が分析的に整然と配置された一覧図は、学習上重要な体形性をもっている。

一方、本題の「いろは歌」の方は、全ての仮名を重複させずに作られた「仮名尽くし」の誦詠文(誦んじて読む歌)として、しかも七五調四句の形式となっているのが特徴である。この作者は誰か何時も取り沙汰されるが、卜部兼方(生没年不詳)が鎌倉時代末期に著した「釈日本紀」には空海(774~835年、真言宗開祖、弘法大師)の作とあるが確かな証拠はない。だが、真言宗の中で学問的な用途に使われていた事実があるため、真言宗の学僧の中の誰かではないかと推定するのが有力であり、このように無常観を織り込んだ仮名尽くしを作れるのは空海に相違ないとの推測も生まれたのであろう。前々から何人かの名前が挙げられていても未だ定説はないのである。

これに倣って、仮名尽くし歌は長い歴史の中で多数詠まれてきたが、この「いろは歌」を超える作品はないと断言できる。

たった四十七文字の「いろは歌」であるが古来から様々な見方と解釈があるため、人によって違った意味になる場合もあるので、一概にこれが正当な解釈だと言い切ることはできない。諸行無常偈を当てはめて解釈するなら次のようになると思う。

いろはにはほへと ちりぬるを(色は匂へど 散りぬるを)・・・諸行無常
わかよたれそ つねならむ(我が世誰ぞ 常ならむ)・・・是生滅法
うゑのおくやま けふこえて(有為の奥山 今日越えて)・・・生滅滅已
あさきゆめみし 忽ちもせず(浅き夢見じ 酔ひもせず)・・・寂滅為楽

註:「有為」とは、因縁によって生じた生滅や、移り変わり止まることのない現実世

界のことで、無常の現世をどこまでも続く奥深い山に喩えたもの。

(3) いろは歌の文献上の初出

承暦3年(1079年)成立の「金光明最勝王経音義」(こんこうみょうさいしょうおうぎょうおんぎ)という、「金光明最勝王経」という経典の中から文字を抽出し字音や意味などを解説(音義)したものの冒頭に仮名の一覧として記されている。ここに記載される仮名は明らかに読み言葉(語)に対する借字であると分かる。これらが土台となり今使われている平仮名の他に「変体仮名」も合わせた仮名文字へと発展する。

以呂波耳本へ止
千利奴流乎和加
餘多連曾津祢那
良牟有為能於久
耶万計不己衣天
阿佐伎喩女美之
恵比毛勢須

(この項、つづく)